



カールトン大学

カールトン大学と同志社

パリオ・リッチェル

米國ミネソタ州ノースフィールドにあるカールトン大学の学生約千二百名は、毎年、学生一人あたり四ドルの募金をして、その総額の大半を一九五三年以来、同志社に派遣する代表の経費にあてている。筆者、ミス・リッチェルは大学の第五代の代表。第一回以来の代表はつぎのとおり

- 第一代 ビアーマン 一九五三―五五
- 第二代 P・グレイシイ 一九五五―五六
- 第三代 N・ウインチ 一九五七―五九
- 第四代 D・ウイルソン 一九五九―六一
- 第五代 P・リッチェル 一九六一―

本年四月、この計画 CII (Carleton-in-Japan) は、従来のように高校への派遣をあらためて、同志社大学に派遣されること、なった。(編集部)

「皆が忙しいの、貴女と一緒にお食事をなさって下さらないかしら」私は断れなかった。それは私がカールトン大学の三年生の時のことであつた。あの晴れた日曜日

の昼、私はナンシー・ウインチと昼食をとりにしたのでした。ナンシーは日本で二年間カールトン大学の代表として同志社で過ごし、そして母校、カールトン大学に、その任務や京都における経験について学生選に報告するために帰つて来たのでした。他の学生と同様に、私は遠い日本のことよりも、すぐに役立つ勉強や学内問題により関心を持っていました。しかし、テーブル越しにナンシーと語るうちに、象牙の塔から引き出されたのでした。私は彼女が京都について話す時の熱意のほとばしりに心打たれたのでした。四年生るとき、私は日本人留学生と大学の寮で同室となりました。日本への関心は一層深まり始めました。自分の仕事を決めなければならなかったころの私には、太平洋の彼方を訪れることが一番

の希望となっておりました。日本での生活の浪漫的な考えや、同志社大学に於けるカールトン・プログラムの重要性を進展させる希望を持って、日本に派遣されるカールトン代表の選考に応募したのでした。

このようなわけで、二年前の七月にカールトン大学第五代の代表者として京都に来たのでした。京都の町々や、同志社の学内を巡り、代表の位置を検討し始めました。京都という新しい場所に紹介される時、常に私のベリオという名前に対し注がれる皆のいぶかし気な視線を感じました。私は自分のことを始めから説明しなければなりませんでした。カールトン大学についてはかなり知られており説明する必要がないと同様に、カールトン代表の同志社大学に於ける意味も知られているものと思っていました。けれど、カールトン大学、カールトン代表、ベリオ、これらすべてを説明しなければならぬことには驚かざるを得ませんでした。

同志社に於けるプログラムの過去十年間の歩みは、まことに曖昧でありましたから今までの代表達も、手を着ける術をも知ら

なかったのです。最初のカールトン代表は同志社中学の英語教師であり、岩倉にあった寮で男子高校生と共に住んでいたのです。私の前に派遣された女子代表のために、大学の女子学生とともに生活できるような小さな寮が設けられ、同時に授業は同



志社中学へと切り換えられました。私も女子代表として、前代表の後任となりました。第一年目は、同志社との複雑な関係、そしてすべてが自分にとって新しい経験であったので、従来通りに任務を果たすことに満足していました。その内に教えている女子中学生達よりも、大学学生達と余暇を多く

過ごすようになりました。プログラムについても省りみはじめたのでした。

私のフロンティア・スピリット、同志社への尊敬の念、代表の財政的な面を完全に支持してしてくれるカールトン大学学生達に対する信頼が私を支えていました。これらの背景のもとに、同志社に於ける、プログラムは改革されるべき時期に達していると思われましたし、私はそれを成しとげたいと思いました。

その改革を行なうためには、まず日本に於けるカールトン・プログラムの歴史を調べて見る必要があります。

初代の代表は、同志社にふとした成り行きで来るようになったことが明かであります。すなわち、一九〇〇年頃からカールトン大学学生は若い卒業生を中国での教育活動のために派遣し始めました。カールトン大学在學生が、このプログラムの財政面を支持し、そして事務的な面はアメリカン・ボードが取計らったのでした。一九四九年、このプログラムは中国で中断を余儀なくされました。一九五三年（昭和二十八年）には、岩倉の同志社高校にきていた若い宣教

師が任期を終わる前に日本を去らねばならなくなりました。そこでアメリカン・ボードはカールトン代表がその後任になるように要請したのでした。このように、同志社に於けるプログラムを指図したのは、同志社でもなく、カールトン大学でもなく、アメリカン・ボードによってでした。代表の位置が始めから直教師として扱われ、若いカールトン代表が学生によって送られていくということが、同志社で認められなかった。まに継続されてきたように思われました。

私はカールトン大学への認識と、同志社大学での若い代表が独自の任務を果たすことができるプログラムを作りたい一心でした。プログラムの改革をして大学生との交わりを持ち、共に学ぶようにするのが好ましい方向と思われました。私は単なる偶然なことから芽生えたプログラムをより意義のある充実したものにしりたいと思いました。代表の教育任務を大学に移すことの希望、カールトン・ハウスを大学寮にするこの希望を持ち大塚総長、上野学長のもとに伺ったのでした。思えばそれはたいへん大胆な試みでした。その頃は、もしプログ

ラムが継続されるとすれば、改革されなければならぬという信念に満ちておりましたから、そのような大胆な試みも当然なことのように思っていました。

私の望みのすべてが達成されたといえればそれは物語の半分を語ったこととなります。というのは、その蔭には涙や失望、試練、憤激があったからなのです。

しかし今日では、同志社大学に於けるカールトン・プログラムは二大学によって押し進められています。カールトン代表として大学で教え、大学学生寮カールトン・ハウスに住み、運営委員となつて下さる教授御夫妻に元気づけられて楽しく責任を負いつつ生活しています。週一度、いろいろな学部のあるゆる学年の学生が集まり「大学教育を受けた女性の社会的役割」「学生のあり方」「マス教育」「時事問題」等を活発に討論し合っています。

カールトン・ハウス寮生(大学女子学生)とすべてのことを一緒にすることを通じてより深い友情を得ています。寮生達は活発でよい学生であり、料理もうまく、その上寮に於ける研究会やゲストをお招きしての

夕べなど、テキパキとその役割を果たしておられます。

カールトン代表として学生達と交わりを持つ機会が多くなりました。そしてプログラムはまとまった形をとるようになりました。振り返ってみますと、もし私の学生時代、私があの日曜日の午後、ナンシーと昼食をとるに代わり、本にかじりついていたら、多分私はアメリカの何処かで幸せな家庭におちついていたことと思います。私は、ところが、日本に住んで豊富な経験ができる機会を与えられました。

その上、同志社に尊敬の念を持ちつつ、カールトン大学を母校として愛しつつ、私の時間とエネルギーを同志社大学に於ける意義あるプログラム設立のために費すことができました。両大学の同意に基づく計画や企画のもとに、二大学間の交流の継続されることを希望し、互いに両大学が「良心の全身に充満したる丈夫の起り来たらんとを」と新島先生の述べられるような人材を創ることを目的として、援助し合うことを切に願います。

(カールトン大学第五代々表)